

発達障害と不器用（8）

企画者	奥住秀之（東京学芸大学） 平田正吾（茨城キリスト教大学）
司会者	田中敦士（琉球大学）
話題提供者	増田貴人（弘前大学） 平田正吾（茨城キリスト教大学）
指定討論者	田中敦士（琉球大学）

KEY WORDS: 発達障害, 不器用

【企画趣旨】

例年開催しているこの自主シンポジウムでは、発達性協調運動障害や自閉症スペクトラム障害、知的障害などの様々な障害における運動面の問題に関して、実験心理学的手法や運動学的解析を用いた最新の研究結果についての話題提供を行うと共に、発達障害児における不器用の特性解明についての議論を重ねてきた。近年の話題提供や議論の内容には、発達障害児の不器用に対してどのように支援していくべきかという支援原則の明確化も、その射程に含みつつある。本年度は、知的障害や自閉症スペクトラム障害における運動面の異同についての話題提供と、発達性協調運動障害に対する生態学的介入の効果についての話題提供に基づき議論を行い、発達障害児における不器用に対する理解を更に深めていきたい。

【話題提供者の趣旨】

1) 発達性協調運動症が疑われる幼児を対象とした生態学的視点によるボール活動支援

(増田 貴人)

動作の不器用さを主訴とする発達障害、発達性協調運動症(DCD: Developmental Coordination Disorder)については、本年4月に第一回日本 DCD 学会が神戸で発足・開催されるなど、学術的・社会的注目を集めるようになっていく。

DCD は、直接的に遊びや操作などの身体活動を妨げることや、それらを契機とした自尊心の低下など心理社会的問題、学校不適応行動のリスク要因にもつながることなどが報告されているものの、その一方で他の発達障害の副症状のひとつに扱われたり、集団活動を乱す非社会的行動につながりにくいいため援助の対象にされなかったりすることも少なくない。DCD のある子どもへの教育的支援をどう展開するかは、国内の報告例も多くなく、喫緊の課題といえる。それを受け昨年度の本学会シンポジウムでは、DCD のある幼児に対する教育的介入支援について Newell(1986)のダイナミック・システム理論モデルに基づく支援理論をもとに試みた事例を話題提供したところであった。これは、DCD 児本人の意欲や動き(個体)、対象児に与えられる課題の水準や質(課題)、そして対象児に接する最適な人的・物的環境(環境)の3要素それぞれを、その3者間の相互関係を調整し、本人による目標や課題の選定をふまえて活動の水準を調整していくことで、子どもの動きの質を改善しようとする考え方である。

本時でもこの視座を継続し、引き続き実施している介入支援の試みについて報告する。なかでも、独国の地域スポーツプログラムとして用いられているバルシューレプログラムを参考に、ボールの投捕スキルに着目した支援の試みについて話題提供を考えている。

2) 知的障害児・者における不器用の発生メカニズムについての検討

(平田 正吾)

これまでの本シンポジウムにおいても発表してきたように、発表者は発達障害児の中でも重篤な知的障害のない自閉症スペクトラム障害(ASD)児を取り上げ、彼らの運動面における不器用の特性や関連要因を明らかにするための検討を行ってきた。昨年度の話題提供では、ASD 児が標準的な手指運動課題であるペグボード課題を遂行している際の様子をハイスピードカメラで撮影した上で解析を行うことから、彼らの手指運動課題の低成績が運動遂行中のどのような要素に基づくものであるのか検討した結果について報告した。この研究では、ASD 児の中でも手指運動課題の成績が低い児は、ペグを把持する際の掴み方に特徴があることが明らかとなり、これは運動プランニングの問題を反映しているのではないかと考察された。しかし、実際に運動プランニングの水準を評価する課題を ASD 児に実施し、ペグの把持様式との関連について検討したところ、両者の間に明確な関連は認められなかった。

今回の話題提供では、こうした前回の検討結果を踏まえ、ASD 児と同様に運動面の不器用が指摘されることが多い知的障害児・者における手指運動を取り上げ、ASD 児と同様の課題と分析を行うことから、ASD と知的障害における不器用の特性の異同を明らかにすることを目的とした研究の結果について報告する。知的障害児・者に対してペグボード課題を実施し、その遂行様相を分析したところ、ASD 児では観察されなかった把持様式が優勢に現れた。また、ASD 児と同様に運動プランニングの一種である End-state comfort effect(ESC)の出現を見るための課題を実施したところ、知的障害児・者においても ESC の出現率は低いことに加え、手指運動課題の成績とも明らかな関連は認められなかった。こうした一連の検討結果に基づきつつ、発達障害児における不器用の多様性について議論したい。

【指定討論者の趣旨】

障害のある子どもにおける運動面の問題は同質のものであるのか？また、発達障害児における不器用の関連要因を明確にすることは、不器用に対する生態学的介入においてどのような役割を果たすのか？今回の話題提供で取り上げられた事柄の教育現場や臨床活動への応用可能性も意識しつつ、フロアの参加者も交えた活発な討論を行いたい。

付記：本研究への参加及び発表に関する同意は対象児の保護者より得ている。

(OKUZUMI Hideyuki, HIRATA Shogo, TANAKA Atushi, MASUDA Takahito)